



シリーズ「遺跡を学ぶ」

094

新泉社

筑紫君磐井と「磐井の乱」

岩戸山古墳

〈改訂版〉

柳沢一男

筑紫君磐井と
「磐井の乱」
―岩戸山古墳（改訂版）―
柳沢一男
【目次】

第1章	筑紫君磐井の墓	4
1	奈良時代の史書に記録された古墳	4
2	磐井墓探しの歴史	7
第2章	岩戸山古墳の実像	12
1	南筑後の古墳と岩戸山古墳	12
2	八女の首長墓系列	16
3	北部九州最大の岩戸山古墳	23
第3章	石製表飾の語るもの	31
1	石製表飾と石人石馬	31
2	甲冑形石製品の盛行	35
3	多様な石製品の登場	38
4	岩戸山古墳の石製表飾	41
5	岩戸山古墳以後の石製表飾	54
第4章	敵か味方か？ 磐井と継体	60
1	文献にみる「磐井の乱」	60
2	有明首長連合の形成と衰退	62
3	九州勢力の再結集―継体王権との連携	67
第5章	朝鮮半島情勢と「磐井の乱」	73
1	朝鮮半島の倭系古墳	73
2	「磐井の乱」の要因	80
第6章	律令国家への道	85
1	九州諸勢力の動向	85
2	ミヤケの設置	87
参考文献		91

第1章 筑紫君磐井の墓

1 奈良時代の史書に記録された古墳

九州の中西部、福岡県八女市やめの北寄りを西流する広川ひろかわに沿って八女丘陵とよぶ台地がのび、そのほぼ中央付近に、北部九州最大の前方後円墳の岩戸山古墳いわとやま（現状の墳丘長約一三八メートル）がある（図1）。この古墳は、これまでの調査で六世紀前葉に築造されたことが確定し、同時期の古墳としては大阪府今城塚古墳（墳長約一九〇メートル）、愛知県断夫山古墳だんぶさん（墳長約一五〇メートル）、群馬県七興山古墳ななこしやま（墳長約一四〇メートル）に次いで列島第四位の規模である。

岩戸山古墳を特徴づけるのは、膨大な数の人物や動物、各種器財を模した石製表飾せきせいひょうしやく（石人石馬とよぶこともある）が採集・発掘されたことにある。さらにこの古墳を著名にしているのは、古墳の造営者が古墳時代最大の内戦といわれる「磐井の乱」の当事者Ⅱ筑紫君磐井つくしのきみの可能



図1 ●岩戸山古墳（南から望む）

岩戸山古墳は筑後川の南岸に広がる南筑後地方を見渡す八女丘陵上に位置する。東西12 kmの八女丘陵上に分布する300基あまりの古墳は古代筑紫君の歴史を刻む。

性が高いことによる。磐井は、筑紫君磐井（『筑後国風土記』逸文）、筑紫国造磐井（『日本書紀』）、あるいは竺紫石井（『古事記』）とも記されるが、本書では筑紫君磐井とよぶ。奈良時代に作成された記録に、二〇〇年前の事件が採録されたことは異例の扱いである。

『筑後国風土記』逸文にみる磐井墓

『筑後国風土記』は奈良時代に国ごとに編纂された地誌である。原本は失われたが、鎌倉時代後期の卜部兼方が著した『釈日本紀』にその一部が引用されている。少し長くなるが、磐井に関する部分を吉野裕さんの訳から引用しておこう（記事内容から①・②に区分する）。

①筑後国の風土記にいう、——上妻の県。県の南方二里に筑紫君磐井の墳墓がある。高さは七丈、周囲は六丈である。墓の区域は南と北はそれぞれ六十丈、東と西とはそれぞれ四十丈である。石人と石盾と各六十枚が、交互に並んで列をつくって四方にめぐらされている。東北の隅にあたるところに一つ別になった区画があって、名づけて衙頭という。《衙頭は政所である。》その中に一人の石人があって、ゆったりとして地上に立っている。名づけて解部（檢察官）という。その前に一人の人がいて、裸で地に伏している。名づけて儻人という。《生きていたとき猪を盗んだ。それで罪の決定を受けようとしている。》側に石猪が四頭いる。賊物と名づける。《賊物は盗んだ物のことである。》その処にまた石馬が三疋、石の殿が三間、石の倉が二間ある。

②古老はいい伝えている、雄大迹の天皇（継体天皇）のみ世にあたって、筑紫君磐井は豪

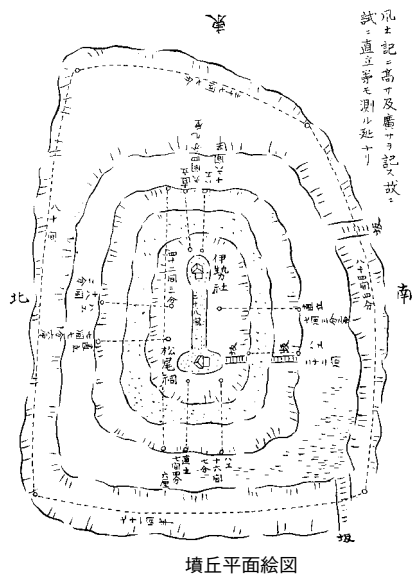
強・暴虐で皇化に従わない。生きている間に、前もってこの墓を造った。突如として官軍が動員され、これを襲おうとしたがその勢力に勝てそうもないことを知って単身、豊前の国の上膳の県に逃げて、南の山のけわしい峰の間で生命を終わった。そこで官軍は追い求めたがその跡をうしなった。兵士たちは憤慨やるかたなく、石人の手をうち折り、石馬の頭を打ちおとした。古老はいい伝えて、上妻の県に重病人が多いのはおそらくこのせいはあるまいか、といっている。（吉野裕訳『風土記』平凡社ライブラリー三三八）

①は磐井墓についての位置と規模、墳丘上や別区での石製品配置についての実見的記述、②は磐井の性格と「乱」の勃発、その後の磐井の消息、官軍兵士による石製品の破壊などの地元の伝承記事である。

2 磐井墓探しの歴史

江戸期の磐井墓Ⅱ石人山古墳説

『筑後国風土記』逸文をもとにした磐井墓探しの歴史は古く、現在の岩戸山古墳と確定するまでには多くの紆余曲折があった。磐井墓探しが本格的におこなわれるようになったのは、『古事記』や『日本書紀』に対する考証学が盛んとなった江戸時代中頃からで、当時は筑後国八女地方のなかで「武装石人」Ⅱ甲冑（甲と冑）形石製品と横口式家形石棺が知られていた石人山古墳が磐井墓に擬せられていた（図2）。



墳丘平面図



墳丘俯瞰図

図3 ●矢野一貞が描いた岩戸山古墳

墳丘俯瞰図の南くびれ部付近に、岩戸山から採集されたらしい石製品群が描かれている。
(矢野一貞『筑後将士軍談』より)

上妻郡吉田村に所在する「岩戸山」で伊勢社再建中に、二体の扁平石人（背面に人面や上半身などを刻出した靫形石製品）が採集された。伊勢社は岩戸山古墳後円部の墳頂にあり、二点の石製品はこの一角から出土したらしい。

この石製品に注目した江戸時代末期の久留米藩士・矢野一貞は、著書『筑後将士軍談』（一八六三年〈文久三〉藩に献上）のなかで『筑後国風土記』逸文の磐井墓記事を検証し、



石製品

緒方惟臣が著した『筑後国石人図考』（一七五一年〈宝暦元〉）には「石人がただ一つ存せり。石人より十間ばかり東にあたりて石窟あり。疑うべくは風土記に所謂石蔵ならんか」と記している。このように、石人山古墳が風土記の磐井墓の記事と対応するとみる見解は、当時の識者のなかで広まっていたとみられる。

そういう見解が谷川士清の『日本書紀通証』（一七四八年〈寛延元〉完成）に引用され、さらに本居宣長の『古事記伝』（一七九八年〈寛政一〇〉完成）の四四之巻に引用されたことによって、磐井墓＝石人山古墳説は確たる位置をしめたという。

石人山古墳から岩戸山古墳へ
江戸時代後半の一八〇八年（文化五）、

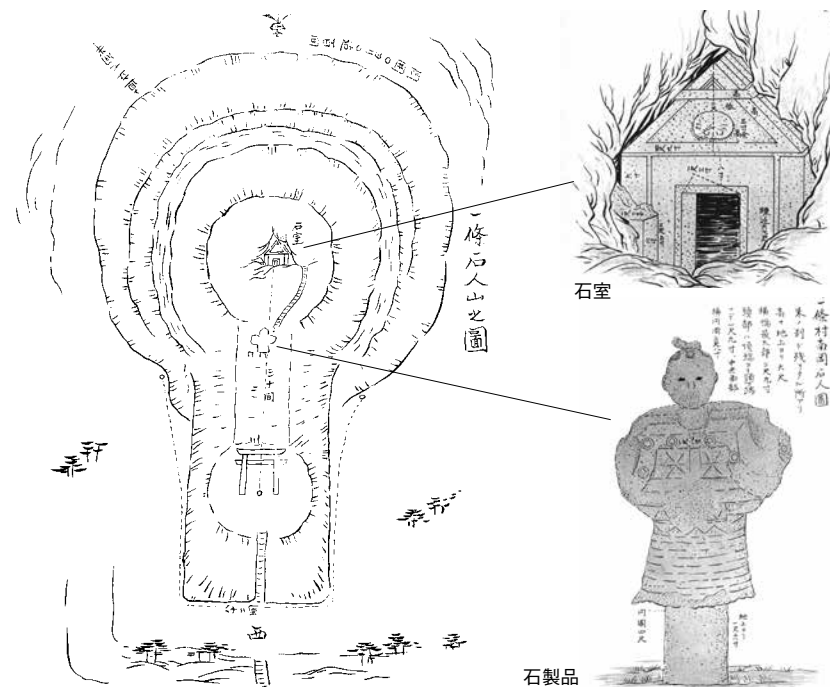


図2 ●矢野一貞が描いた石人山古墳

早くに後円部の横穴式石室と甲冑形石製品が発掘され、江戸時代後期には磐井墓の有力候補であった。(矢野一貞『筑後将士軍談』より)

岩戸山こそ磐井墓であると主張したのである(図3)。

矢野は現在の考古学研究の先取りともいえるような現地調査をおこない、現地での計測にもとづいた墳丘絵図と、岩戸山に散在していた石製品の絵図を作成した。さらに旧福島城跡(現八女市役所一带)周辺に所在した石製品群(人物・馬形など)の絵図も作成し、これらが江戸時代初期に福島城の築城にあたって岩戸山から運ばれたものと推測した。

矢野が岩戸山を磐井墓に比定したおもな根拠は、岩戸山から採集された石製品群と、「県(郡家想定地の古賀集落(現・広川町)の南方二里」という岩戸山の方角と距離(約一・三キロ)が、『筑後国風土記』逸文と一致することであった。

矢野は古墳の規模と逸文の記す数値との対応については十分な説明ができなかったが、郡家所在地と想定した広川町古賀区から、上妻の郡家と推測される官衙遺跡(正恵大坪・大坪東遺跡)が発見されたことは偶然ではないだろう。

森貞次郎さんの磐井墓Ⅱ岩戸山古墳説

戦後、岩戸山古墳の別区や周堤の周辺が引揚者の開墾地にあてられ、墳丘西側と北側の周堤一帯が畑地となった。その際、周堤上からは円筒埴輪片が、東北部の平坦地からはおびただしい数の形象埴輪と石製品が発見された。石製品のなかには、刀形や、鶏・水鳥形、猪形とみられるもののほか、小型人物形の破片などがあったという。それを受けて、一九四六年に九州考古学会がおこなった発掘調査では小型の人物像が確認されている。

これらの事実注目した森貞次郎さんは、後円部の東北にある一辺五〇メートルほどの平坦地を『筑後国風土記』逸文にある「別区」と確信した。しかし、それだけでは磐井墓と岩戸山古墳が一致するとは断定できない。矢野一貞が説明できなかった墳丘規模が未解決のまま残されていた。森さんは、まず「高七丈 周六十丈 墓田 南北各六十丈 東西各四十丈」のうち、「高七丈」(約二二メートル)は、南側周堤の外側から後円部頂面までの高さ約一九メートルを採用して六・三丈、「周六十丈」(約一八〇メートル)は、前方部接続部を除く後円部の墳端長とほぼ一致するとみた。

ところが「墓田Ⅱ墓域」の規模をそのまま南北、東西と読むと、現在の岩戸山古墳の規模とは合わない。森さんは奈良・平安時代の『大安寺伽藍縁起并流器資財帳』や『筑前国観世音寺資財帳』などの文献に、それぞれの辺の長さを方向単位で表現する事例を探しだした。つまり、「南北各六十丈」は東西方向の南辺と北辺の長さが六〇丈、「東西各四十丈」は南北方向の東辺と西辺の長さが四〇丈、と読み解いたのである。その結果、別区を除いた周堤外方の東西長の約一七〇メートルは六〇丈(約一八〇メートル)に、南北長の約一〇一・一三〇メートルは四〇丈(約一二〇メートル)に近似し、風土記の示す墓域の規模が岩戸山古墳にはほぼ一致するとみた。そして、石人山古墳の墳丘規模との検討結果を踏まえたうえで『筑後国風土記』逸文のいう磐井墓は、岩戸山古墳とする論文を発表したのである。これには異論もあるが、従うべき見解だと思う。